

---

# 作家

坂田火魯志

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

作家

### 【コード】

N6019D

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

終戦直後。これまでの価値観が一変し自由になったと言われている。しかしその作家は違うものをそこに見ている。太宰治をモデルにして書きました。

## 第一章

作家

戦争が終わったすぐ後の時代だった。

それまでであった価値観が崩壊してそれまで日陰者だった価値観が出て来ていた。ところがこの新しい価値観とやらがいいかということ決してそうではないのだ。

「何だかねえ」

東京の片隅で。ある作家がこぼしていた。

「気に入らないねえ」

「気に入らないですか」

「うん」

丁度原稿を取りに来ていた馴染みの編集者にそうこぼしていたのであった。小さな執筆用の木製の机を横に置いて座布団の上に座っている。よれよれの紺色の着物とこれまた古い細い帯といった格好だ。顔は細面で少しエラがあるが美男子と言ってよく鼻が高いのが目立つ。髪は収まりの悪い感じでボサボサであった。彼は座布団の上で腕を組んで渋い顔をして編集者に語っているのであった。

「ほら、戦争は終わったね」

「はい」

編集者はその言葉に頷く。これは言うまでもない。

「それについてまず皆色々言っているね」

「何だかんだで終わりましたからね」

「負けてね」

作家はあえてこう言ってみせた。

「終わったね」

「残念ですが」

「そう、残念だよ」

作家

彼は編集者のその残念という言葉をあえて強調するのだった。

「戦争をするからには勝ちたいね。それが普通の気持ちだよ」  
「普通の気持ちですか」

「日本人だったらだよ。日本を親としたら」  
そうして日本という己の祖国を親と定義付けてきた。

「僕達は子供だ。確かに危ない戦争だった」

「アメリカは大きいと皆わかっていましたね」

「そうだよ。負けるんじゃないかっていうのは薄々わかっていたんだ」

当時の日本人も決して愚かではない。その程度のことには誰でもわかっていたことだ。しかしそれでも避けられない戦争だったのだ。そういう時もあるのだ。

「わかっていてもやらなくちゃいけない時があるんだ。そして」  
「そして？」

「親が行くのに子供が行かないなんてあるかい？」

作家は次にこう述べた。

「ないよね。親の窮地には子供が駆け付けるものだよ」

「そうですね。逆もそうですし」

「それでどうしてあの戦争はするべきじゃなかったとかそんなことを言うんだらうね。私はそもそも反対していたって言う奴もいるよね」

「それは確かに」

編集者も作家のその言葉に不機嫌な顔になった応えた。

「あの雑誌にしるそうですし」

「あの雑誌は最近異常に変わったよ」

作家は無然とした顔になって述べた。

「あの新聞もね。新年の記事見たよね」

「革命家ですか」

「冗談じゃない」

忌々しげに言い捨てた。

「あんな男の何処が革命家なんだか。とんでもない奴だよ」

「満州のあれですね」

「そうだよ。何かあったかはもう僕の耳にも入っているよ」

既に満州から命からがら逃げて来た人達がいたのだ。作家は彼等の噂も知っていたのだ。当時のマスコミや知識人はあえてそれを無視していたのである。それは何故か。『平和勢力』である彼等が悪事をしていたとなればそれに同調する当時のマスコミや知識人の一部に都合が悪いからだ。戦後の日本はマスコミや知識人が人類史上最悪と言っていていい程腐敗していたがそれはこの時からだったのだ。

「それでどうしてあんな記事が書けるのか。僕は神経を疑うよ」

「それまではやたらと戦争を支持していたのに」

「僕はこのことは忘れないよ」

その無然とした顔で語る。

「戦争を支持していた奴等が今反対していたと主張するのをね。何があっても忘れないよ」

「そうですか」

「戦争を支持していて何が悪いんだ」

そこをまた言う。

「親について行くのは道理だ。負けるとわかっていても親を見捨てる方がおかしい。そうじゃないのかい？」

「そうした考えは今」

「ないね」

また忌々しげに一言で言い捨てた。

「これからもつとなくなるよ」

「もつとですか」

「それに最近何か共産主義とかどうとか五月蠅いね」

そちらに話を戻す。

「何かキリストの福音みたいに言っているけれど」

「そうですね。さっき話したあの雑誌といいあの新聞といい」

「共産主義はね、そんなものじゃないよ」

彼は共産主義について何かを知っているようであった。

「平和になるとか幸福になれるとか。そんなのは全くの嘘っぱちさ」  
「そういえば先生は」  
「うん」

「ここまで言ったうえで編集者の言葉に頷くのであった。」

「そうさ。昔はそれに賛同していたよ」

「それでどうして今」

「賛同していたからわかるんだ」

「言葉が逆算的なものになった。」

「余計にね。あの時僕は若かった」

「ですか」

「今でも愚かだけれど。それでもあの時にわかったんだ」

「また言うのだった。」

「あの思想はね、人を殺す」

「殺しますか」

「君ね、世の中ってのは綺麗なものじゃないんだ」

「作家は今度は達観したようなことを口にした。」

「完全に綺麗になるものでもないんだ。醜いものだって一杯あるよ」

「それはそうですね」

「哲学的な言葉だった。この編集者はそつちにも造詣があるのだから。作家の今の言葉にはしきりに頷いていた。」

## 第二章

「世の中っていうものは」

「それでどうして完全に奇麗にできるんだい？ましてや革命って言うって」

「革命で」

「金持ちとかを殺すんだろう？だったら僕だって危ないよ」  
言葉が少し自嘲めいてきた。

「実家があれなんだしね」

「そうなりますか」

「なるよ。何しろ彼等はそれに連なるのなら何をしたらいいって  
いう考えなんだから」

こうした話がある。羽仁五郎という学者が論戦をしていて相手に  
対してこう言ったのだ。

「そんなことを言ったら革命の後で君の手に縄がかかることになる  
ぞ」

この言葉が民主的でないのは言うまでもないがそれ以上に革命と  
いうもの、共産主義というものが何なのかを見事に言い表している。  
即ち共産主義者というものは民主主義を実現させようとしているの  
ではないのだ。邪魔者を片っ端から消していく全体主義を目指して  
いるのである。それは当時からわかっていたのだ。彼等は確信犯で  
それを行おうとしていたのである。子の言葉にはそれが出ている。

「僕だって当然危ないね。まあ僕のこととは置いておいてね」

「はい」

また話が元に戻る。

「彼等には賛同できないよ、絶対にね」

「そうですね」

「けれどこれから彼等が大きな力を持つのは事実だね」

「そういえば何処かの教授が日本をファシズムだって言っています」

が

それもこの時から始まっている。戦後五十年以上こう延々と  
言われてきた。それへの細かい検証は五十年以上行われなかったが。

「それはどう思われます？」

「それだつて同じだよ」

作家はそれについても忌々しげに言い捨てた。

「負けたから言っているだけさ」

「やっぱりそうですか」

「確かに軍の目はあつたよ」

それは前置きされる。

「それでもね。堂々と革命が起こつたら殺してやるなんて人間  
はいなかった筈だよ」

「そうですね、それは」

これは編集者も頷くところであつた。

「いませんでしたね、そこまでは」

「特高やら憲兵は厳しかったけれどそこまでは言わなかったよ」

「どうということなんでしょう、今は」

「あれが正しいって思っているんだよ」

作家はまたしても忌々しげに言い捨てた。

「自分達がね。それに」

「それに？」

「今度は自分達が権力者になりたいんだらうね。浅ましい話さ」

「権力者ですか」

「いいかい？君」

ここで作家は少し親しげに編集者に対して声をかけた。もうかれ  
これ十年以上は知っている間柄だがそれ程馴れ馴れしく付き合つて  
はいない。だからこうして親しげに声をかけることも珍しいこと  
であつたのだ。彼は今その珍しいことをあえてしてきたのであつた。

「権力者になつたらどうかしてやるとか言つのは卑しいよ」

「卑しいですか」

「だってそうじゃないか。今に見ておれなんて言うのは」  
彼はそこを指摘する。

「負け惜しみの言葉だよ。それを議論していて相手に脅しに使うんだからね」

「そうですね。本当に」

「まだ戦争前はよかつたよ」

「ここまで話して慥然とした顔に戻してまた言った。

「そこまで卑しくはなかったと思うよ」

「そうでしょうか」

「何か何もかもが急に変わったね」

「今度の言葉はそれであつた。」

「戦争を賛美していたのに戦争は駄目だつてなつて。これで共産主義にでもなつたら」

「どうなるでしょうね」

「少なくとも碌なことにはならないね」

「これだけははっきり言えるのであつた。」

「とんでもないことになるよ。絶対に平和にはならない」

「なりませんか」

「ソ連の軍隊が東京に来る」

「あの連中が」

編集者はそれを聞いてだけで顔を顰めさせた。彼は生理的にソ連とその軍隊を嫌悪していたのである。何だかんだで国民の多くは戦後間も無くから長きに渡つてソ連とその軍隊を嫌悪してきていた。満州のこともあるし他にも色々聞いていた。結果として国民の方が知識人より遙かに賢く常識があつたのである。戦後日本の特徴として知識人の腐敗の他にその無能さや卑劣さも挙げる事ができよう。

「そしてやりたい放題やつて人がどんどん殺されるね」

「最悪じゃないですか」

「それで終わりじゃないよ」

作家の言葉はまだ続くのであった。

「革命政府とかができて僕達は共産主義の奴隷になるさ」

「そしてあの連中が権力者ですか」

「どうだい？こうした未来は」

「小説でも勘弁願いたいですね」

編集者はそついった作品は書かないように述べてきた。

### 第三章

「絶対に」

「安心していいよ。こうしたのは僕の作風じゃない」

「そうですね」

その言葉を聞いてほっとすると共にその通りだと思った。この作家はそうした風刺や将来のことを書く作家ではない。それは今思い出した。

「それじゃあ」

「これからも書きたいことは変わらないさ。ただ」

「ただ？」

今の作家の言葉に突っ込みを入れる。

「これからのことは考えただけで滅入ってしまうね」

腕を組んだままであった。そのままふう、と大きく溜息をつくのであった。

「どうにもこうにも」

「そうですね。革命が起きなければいいですが」

「少なくとも多くの人は彼等程卑しくはないよ」

作家はここで顔を少し穏やかにさせて言うのだった。

「まだね」

「流石にそれは。あそこまで卑しい連中は」

「だから革命にはならないだろうけれど。ただ」

「何かありますか」

「これから日本はどんどん腐敗していくだろうね」

また溜息を出しての言葉であった。

「彼等がいる限り」

「知識人はもう駄目ですか」

「作家ももう駄目だよ」

作家  
自分自身に対しても言う。その言葉は厳しいと共に諦めも深く混

じつたものであった。

「このままどんどん腐っていくよ。スターリンみたいなのを絶賛しているのが立派な人間って言われていくんだらうね」

「作品もですか」

「そんなことを言っている奴が真つ当な作品を書けると思つかい？  
作家はまた編集者に問うた。

「思えないよね、とても」

「そうですね。作品にも出ますから」

「卑しい人間でもいい作品は書けるかも知れない。けれどそこにある禍々しいものだって出るんだ」

「作品の中に」

「人はそれを見るんだよ。それで顔を背けられたら終わりさ」  
作家の言葉はさらに厳しくなる。

「そうした作品ばかりになっていってしまうかな」

「このままどんどんと」

「腐って駄目になっていくだろうね」

「嫌な話ですね、どうにも」

「また言っけれどね」

今度は苦い顔になって編集者に語る。

「負けるのは悪いことじゃないんだよ、戦争にね」

「はい」

「問題はそれからなんだ」

彼はそこを強調する。

「全部否定するのも駄目だし何もかも変えるのもかえってよくないんだ」

「それよりも」

「捨てていいものと悪いものを見極める」

まずはそれだと言うのであった。

「それからだね。そして入れていいものはいいけれど」

「悪いものは入れないと」

「今は逆だよ。昔は全部駄目で」

「入れて悪いものこそいいと」

「それがわからないと本当に駄目だよ。このままだと作家は語る。」

「日本は幸せになれても腐っていくだろうね」

「腐りますか」

「少なくとも品性は期待できなくなるよ」

「こつも言つが彼の言いたいことは同じだった。」

「だってさ。革命だつて言っているのは知識人だ。彼等があそこまで酷いと」

「周りにも移つて」

「それは恐ろしいことになるよ。それを思うとね」

「気が重くなりますね」

「これから書きたくないことを書くかも知れない」

作家はボソリと呟いた。

「これからね。どうなるかわからない、自分でも」

「無理は為さらずに」

「無理か。するかもね」

「それも否定できなかつた。自分自身で。」

「それでも書いていつて」

「どうされますか？」

「戦うまで戦うよ」

「今度は戦うと言い出した。」

「僕なりにね。これから」

「そうされるんですか」

「まあ見ていてよ」

編集者に対して微笑んでまた述べた。

「僕がね。この細い身体でどう戦うのかをね」

「わかりました。それでは」

編集者も彼の言葉に応えて頷く。

「それを側で拝見させて頂きます」  
「うん」

作家は編集者のその言葉にまた笑顔を見せて頷いた。これが彼の戦いのはじまりであり戦後間も無くその新しい権威や思想に対抗し続け作品を書いていった。それは今でも残り彼の当時の戦いを見せられているのであった。

「あれは昨日の話に思えますよ」

かつて編集者だった老人は目を細めて僕に教えてくれた。もう家から出ることも殆どないが今でも豊饒たるものである。そうして僕に話してくれるのだった。

## 第四章

「つい昨日のね」

「昨日のですか」

「ところがそれはもう六十年も前です」

次に月日を出して微笑む。

「長いですね。六十年は」

「そうですね」

僕もその言葉に頷いた。今度は僕が話を聞いていた。

「戦争ももう知らない人の方がずっと多いですよ」

「では共産主義は」

「それも過去の話でしょうね」

僕はこう老人に答えた。

「まだ引き摺っている人間も多いようですけれど」

「そうですね。あれは」

老人もこれに関してはわかっているようであった。

「もうそれしかすぐるものがないですから」

「彼等にとつてはですか」

「あれは似非宗教です」

それまで温厚なだけであつた顔に少し険が入った。

「そういうものです。ですからそうそう容易には」

「消えませんか」

「ですがそれももう僅かな力ですね」

「少なくともソ連があつた頃よりは力はないです」

これは事実だつた。言い換えれば共産主義はソ連があつた頃は力があつたのだ。今残っているのはそれが忘れられずに蠢いているだけだ。

「全然ですね、それも」

「あの頃は全然違いましたから」

老人はまた僕に言ってくれた。

「それこそ本当に大変でした」

「明日にも革命が起こりそうな雰囲気だったとか」

「そうでした。ですがそれも昔の話ですね」

「僕にとってはそれも信じられませぬ」

向かい側に座って微笑んでいる老人に対して答えた。安楽椅子に座る老人はそこで穏やかに過去を回想してそれを見ながら僕に語りかけているのだ。

「歴史では読んでも」

「歴史ですか」

「そうですね」

また答えた。

「僕の中では完全にそうです。歴史です」

「そういうものなんでしょうね」

老人は僕のその言葉に納得したかのように頷くのだった。

「何もかも。時間が経てば」

「そうだと思います」

僕はまた答えた。

「あの人もそうですね」

「もう。歴史なのです」

老人はまた僕の言葉に何かを思ったようだった。

「あの人との話も」

「僕の中では生きている感じはしないです」

「そうですね」

老人は生きているという言葉に反応を見せてきた。

「それなのです。生きているという感じです」

「それなんですか」

「私の中ではあの人は生きているんですよ」

またその顔に回想が見える。暖かい日差しの中でその顔が照らし出される。

「ずっと。あの時の話も」

「申し訳ないですが実感が」

「やはりその時に生きておられなかったからですね」

「そうなります。やはり僕の中では歴史です」

「確かに歴史になりました」

老人は僕の今の言葉に応えてくれた。

「ですがそれでも生きていますよ」

「貴方の中に」

「はい。若い日の思い出です」

また穏やかな微笑みを見せてくれた。

「それをお話できて何よりです」

「そうでしたか」

「覚えておいて下さい。あの人の戦いを」

僕はこうも言われた。

「何があつて何に対して戦われたのか。よく」

「わかりました」

僕は老人のその言葉に頷いた。そうして言った。

「この心の中に留めておきます」

「それである人は生き続けますから」

「それですか」

「ええ、それで」

また答えてくれた。

「あの人がそれを喜ばれるかどうかわかりませんがね」

「人は人の心の中にある限り生き続けるのですね」

「私はそう思います」

それがこの老人の考えであつた。それは今はっきりとわかつた。

「ですから私は貴方にお話させて頂きました」

「有り難うございます」

僕はそのことに対して礼を述べた。それがとても嬉しかったのだ。

「ではあの人にはこれからも」

「生きていて欲しいですね」  
「そうですね、本当に」

僕は最後に老人のその言葉に頷いた。左に暖かい日差しを感じながら。もう戦争も共産主義もなくなったが。あの作家のことはまだこの世にあって生き続けているのだった。この老人と僕の中に。

作家 完

2007・12・15

作家

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6019d/>

---

作家

2009年3月24日11時02分発行

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。